石山敏彦著作集 6
青空小説

青空の眼

片山敏彦著作集　第六巻

片山敏彦著作集 6
© 1972 Misuzu Shobo

1972年2月20日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 片山敏彦（かたやま としひこ）

発行者 東京都文京区本郷3丁目17-15
北野民夫

印刷者 東京都新宿区改代町24
田中昭三

発行所 東京都文京区本郷3丁目17 郵便番号 113
株式会社 みすず書房
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

（第5回配本）

理想社印刷・鈴木製本

目次

詩の心……5

I

諸芸術の照応……13
芸術と主題……32
秩序と照応……44

II

今日の絵画の思想……57
クレエにおける「内容」……69

クレエの絵画論——作画の方針……80
印象派……92
ボナール……104
オディロン・ルドン……113
セザール・フランク……121
ベートーヴェン　九つの交響曲……134
バッハの一幻影……144

III

回想と音楽……159
日曜の午後の印象……171
音楽と友情……176

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

画作と詩心……180
世界言語としての美術……183
青空の眼
ルノワール……186
マチスへの感謝……187
ピカソとリルケ……189
ルオー……190
マチスとピカソ……194
ゴッホの明るさ……198

IV

美についての感想……205

高田博厚について……………… 218
ロダンを憶う……………… 226
音楽の精神性――モーツァルトを記念する年に……… 235
歓喜の方へ――ベートーヴェン頌……… 244
解　説……………………山口三夫… 261

詩の心

詩の心のみなもとは、これを広い意味で考えれば文字表現による詩の世界以外にもいたるところに見いだされる。中宮寺の観音像や、フィレンツェのフラ・アンジェリコの壁画の前に立つときわれわれの心を惹きつけわれわれの魂を諧和の感情へ呼びさまし、そしてわれわれ自身のものでありながら平生は眠っているような高い、潤いのある微妙な限りなく生命的な意識を美感を通じて自覚させるあの力は詩的なちからである。

しかも詩の心が必ずしも芸術品の領域ばかりでなく、科学実験室の中の科学者の集中した意識の中にも生まれることをヴァレリーはルフェーヴルに語っているし、心理学者のシャルル・ボードワンも『プシケーの誕生』の中で言っている――「科学者に発見をさせるのは科学者の衷なる詩人である」と。広い意味での詩の心は、具体的時間の中で意識が無意識に接して、あたかも夢の中で自発的形象が生じるのに似た趣きをもって、創意的な象徴形象が生まれ出るようなばあいに必ず活動する心なのである。

それゆえ、音楽のシューベルトの作品の中にも画家のジョルジュ・ルオーの絵にも私はゆたかな詩の心を感じる。彼らの仕事には無意識的なものが濃くはたらいていてそのために彼らは一種の二重人格のような印象をさえ与える。何かに憑かれていて、或る力が彼らを素直な道具のように用いているような感じである。しかも創作的態度の面から観るとき彼らは極度に意識的であり、仕事の細部にわたって天才的に丹念である。まことにこの二人の音楽家と画家とは、特にモデュラシオン（転調）の意義に対してほとんど宗教的なほどの敬虔さを持っている。そしてこのことが彼らの仕事に新しさを与えている、――真に詩的なあたらしさを。

転調は、その精神的な意味から考えると、日常現実の体験を、高い理念の象徴性へ高めて行く近代的な一方法である。シューベルトの音楽の中では、親近な日常的な感情がいつのまにかおごそかな普遍的な感情に変容する。ルオーは煙突の立つ場末の町角にいつしか子供たちといっしょに立っているキリストを描く。この転調を必然ならしめるものこそ詩の心である。だから詩の心とは芸術の題材的感傷性のことではない。いな、ルオーにおける転調の秘義は、画面の実証性として、あの無比なマチエールの良さを要請するところのものである。

ルオーにおける詩心と画面のマチエールの立派さとの関係――ちょうどその関係に照応するような関係が、すぐれた詩人の言葉表現において彼らの詩心と形姿実現とのあいだにある。近代の詩は密度を増した。フランスにおいてはマラルメ以来、ドイツにおいてはニーチェ以来、詩的認識と言語表現とのつながりはきわめて密度の大きいものとなり、ときとしてそれは悲壮な意味のものでさえある。

一人の詩人が――

La vie est là, sonore et qui cogne la porte
A grands coups de poings de soleil

人生が朗々とそこにいる
日光のこぶしで戸を逞しく敲きながら。

と表現するとき普通の言葉表現の習慣から言えば、これは無意味な戯れとも見えるかもしれない妄想的な思いつきにすぎない、と言われるかもしれない。

しかしこの二行を読み返しつつ響きとヴィジョンとの協力的な効果をわれわれの心の中で吟味してみるならばわれわれは悟るだろう――人生には、こういう暗喩でしか言い現わせないような契機が厳存していて、そういう契機に的確な（論理的に、ではなく詩的に的確な）表現を与える仕事はわれわれの生活の中に或る種の宇宙の存在を暗示するということを。真の詩人はコスモスの建設者であり、そしてそのコスモスは生の根元形式である具体的な時間と生成との上に建てられる。

すぐれた詩が生命感と秩序感とを同時に与えるのもそのためである。詩は自発的な新鮮な形姿創造を通じて高い叡智を指さすものである。真の詩人であるためには或る種の教養を必要とすることはアランも言っているとおりである。詩人は深く見る者でなければならない。

深く見られたヴィジョンがおのずからコスミックな普遍性を持ち、その普遍性が他の人々の精神生活に理屈を超えた喜びや鼓舞を与えてこそ、詩は文化の導きてであることができる。真の詩人は人の心の風土を、ヘルダーリーンのいわゆる「神々しく醒めている」世界にみちびくゆえに偉大である。

私は最近シラーを読み返す機会を持った。そしてこの詩人がなぜ今でもあのように尊敬されるかという理由がいっそうわかるように思った。シラーを旧い詩人のように思うことは確かに読み誤りである。この詩人もまた永遠の今の中に生きている。彼が書いた不滅の論文や、彼が雑誌「ホーレン」を編集してドイツ国民をまことの文化へ薫陶しようとした意図は、ことごとく正銘の「詩の心」から湧き出ている。詩の心こそ意図を個人的関心から超えさせ、仕事の動機を浄め宇宙的責任感の中に生かしめるものである。しかも詩の心の根底には諧和への大きな予感がある。さればこそシラーは『歓喜への頌歌』の詩人であった。そしてこの詩の幽暗な予感的要素に、輝かしい完成的形姿を与えた人はベートーヴェンであった。

シラーの死後、彼についてきわめて美しい追憶的なエッセイを書いたヴィルヘルム・フンボルトは、シラーがインドの詩と思想とを識らなかったのは残念だった、と言っていることがたびたび私の心に思い出される。ベートーヴェンがシラーの詩『歓喜へ』を完成したと、今私が言ったことはまたこのこととつながっている。

詩の心は私に海の姿を象徴的に思い出させる。海が多くの流れを受け容れるように、詩の心は精神の活動の多様な支流を受け容れる。海は綜合的であるとともにリズムと旋律と沈黙とを持っている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

海がそれに近寄るものの気宇をひろげ、オゾンの薫りをひろげるように、詩もまたわれらの心を拡げてわれらを神的な薫りで包む。海が生の昂揚と冒険と死とについて語るように、詩もまたそれらのことどもを真実に語る。

詩は苦悩を洗ってそれを愛と美とに高め、それに永遠性の反映を帯びさせる。詩は今日の文化に対して、明日の綜合の萌芽を発見すべき使命を持っている。詩は言葉のたんなるレトリックではない。詩人の本性は真の神秘家のそれに近い。詩の心は人間的品位を精妙に鍛え、生命と秩序とのあいだに生きた音楽を生む。

（『詩と文化』収載）

I

諸芸術の照応

十九世紀のフランスのフロマンタンは小説『ドミニク』の作者として堂々たる文人である一方また画家でもあった。彼が大きい旅行家であったことは、フロマンタンの文人的素質と画家的天禀（りん）とを同時に養った。詩人ボードレールは美術批評『一八一九年のサロン』の中で画家としてのフロマンタンをよく論じているが、ボードレールはフロマンタンの画面に立派な詩心を観ている。「詩と魂とを持たぬ旅行家は数多いが、彼の魂は、私の識っているもっとも詩的なもっとも貴重な魂の一つである。」

文学と音楽と美術との近代的なそして本質的な照応と交流とはボードレールの頃から特に深化されたような気持ちが私はする。ボードレールの美術評論はじつにみごとなものだ。ボードレールの時代に音楽のアルモニー（和声）の近代的な意味をほんとうにつかんでいたのはおそらくボードレールだけだろう、と数年前にデュアメルが書いていたが、ボードレールの『ドラクロワ論』などの立派さはたしかにヴァレリーの美術論の「照応法」の先駆だと思う。彼らの芸術論はむしろ文学上の一ジャンルとしてきわめて興味と意義との深いものだ。

一方においては、美術家の書いた文筆作品のクラシックと言えるものがある。デューラーやドラクロワの『日記』などがそれである。ドラクロワの文筆作品にはラファエロやプーサンについての評論や、哲学的考察や、色彩についての研究や多様な主題が取り扱われて、彼の頭脳・教養の大きさが示されている。ロマン・ロランも「ドラクロワという浪漫主義の代表画家は彼の文章を通じてみると大きい古典主義者だ」と言っている。

或る日画家ドラクロワと音楽家ショパンとがパリのセーヌ河畔を共に逍遙して、浪漫派の音楽家は熱心に語り、浪漫派の画家は熱心に耳を傾けた。ポーランドの鶯(うぐいす)はパリの黒鶫(つぐみ)に、薔薇の花の香りのする恋の挿話を語ったのだろうか？　いな、ショパンはドラクロワに音楽理論の中の「対位法」（コントラプンクト）というような、もっとも無味乾燥な冷静な問題のみを語ったのであった。その後でドラクロワは『日記』の中に、芸術を司っている法則の神々しい美しさに対する讃嘆の心を書き記したのである。

或る日ドラクロワは黄色い布地の翳の色を描き悩んだ結果、ルーヴル美術館に出かけてルーベンスの絵を見直そうと思い馬車を呼んだ。玄関に走り出て車に乗ろうとした瞬間彼の眼は、黄色く塗っている車体の翳の色を見た。彼はルーヴル行きを中止して大急ぎで画室に帰った……

「自然は」――とヴァレリーは『コローの周囲』の中で書いている。「自然はドラクロワにとっては辞書であり、コローにとってはモデルである。」

ただし、「自然は辞書なり」ということはヴァレリーの思いつきではない。ボードレールが、『ドラ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo